

「台湾・フィールド調査 参加報告書」

京都大学経済学部 4 回・長友剛輝

① 学習成果

経済研究科に進学後東アジア経済史に関する研究を行う予定である私にとって、今回台湾に初めて訪れることができたのは非常に意義深い経験となったと思う。出発以前にも台湾経済・歴史に関する文献や映像（映画『悲情城市』など）を通して予習したつもりだったが、企業訪問や農場見学、現地の大学での講義を通して日本国内では得ることのできない新たな視座を獲得できたと振り返って思う。

私が今現在台湾史で一番関心を持っているのが日本の敗戦から蒋介石率いる国民党統治の期間である。植民地期（～1945）と高度経済成長期（1970年代～）の架け橋となるこの期間に関する文献・資料は言論弾圧・白色テロなどにより数も限られ、今後さらに研究する余地のある時代である。そのような意味で4日目の農場見学（三芝共榮社區）の際、本土から渡ってきた国民党政府が台湾農民に対しどのような政策を採ったのか直接質問することができたのは大学院での私の研究に資するものになったと思う。

② 海外経験

今年2月に参加したタイ・フィールド調査に続いて、今回の台湾・フィールド調査は私の学生生活の中で2か国目の海外渡航となる。初めてこのプログラムに参加したタイの時は英会話に全く慣れておらず、大学での講義内容についていくのにも大変な苦勞をした覚えがある。しかし約1年後となるこの台湾・フィールド調査では学問的な議論を理解できるほどまでになり、未だ不十分ながらも語学力の成長を実感できた。特に私にとり人生初めてとなる英語プレゼンテーションをなんとか無事やり遂げることができたのは大変大きな自信となった。また調査全体を通じて国立台湾大学・国立政治大学の研究者・学生と親しく会話する機会が多々あり、兵役・言語・国際関係など台湾内外の諸問題について台湾の人々がどのように感じているのか実際聞くことができたのは貴重な体験となったと思う。

このフィールド調査自体にはあまり関係しないが、私は昼食時や自由時間を利用して地元民しか行かないような食堂や台北郊外へ電車やタクシーを使って訪れるなど一人で色々な場所を動き回っていた。その際中国語を全く解さない私にとって非常に役に立ったのが漢文（大学受験で学ぶような）による筆談である。同行の中国人学生曰く「ピンインを無視しかつ古めかしい」漢文でも、料理を注文する時や道を尋ねる際におおよそ台湾人に通じたということに内心驚きを隠せなかった。

③ プログラム内容

「学習成果」の項に記載した通り、4日目の農場見学が訪れた場所の中で最も印象に残るものであった。地域ぐるみ、更に政府自治体との交渉によって三芝地区における農業再生のため道を模索し続けているという取り組みは同様の農業問題を抱える日本人からしてみても無視できないと思われる。しかしそれ以上に、農家兼ガイドの方に蒋介石統治時代の台湾農村の状況を質問することができたのは私にとって最も大きな収穫である。その方のお話によれば、戦後台湾統治を開始した国民党政権は大陸から渡ってきた外省人に分配するため農民の土地を強制的に取り上げたということであった。参考となる文献資料の数がかなり限られているこの時代を研究するためには、このように人々へのインタビューを通じた「オーラル・ヒストリー」も視野に入れる必要があると改めて気づかされた。

④ 進路への影響

来年度経済研究科に進学し東アジア経済史を専攻したいと考えている身からして、このたびのフィールド調査

は大変貴重な経験となった。東アジアコースに所属する様々な国籍の大学院生とも交流することができ、自分の大学院生活についてのイメージを形成する一助となったと思う。また実は来年3月に予定されている国立台湾大学での短期語学留学への参加を考えているのだが、その際は今回の経験をもとにし更に自分の台湾についての関心を掘り下げてみたいと思う。